

セルロイド成型加工のパイオニア永峰清次郎翁伝

セルロイド産業は大きく分けて二つからなります。一つはダイセル、タキロンなどのセルロイド生地そのものを製造する産業。今一つが生地を成型加工して様々なものを製造する産業です。

前者のパイオニアが小蝶六三郎、千草稔、三輪善兵衛なら、後者は千草稔、永峰清次郎と言えるでしょう。

今回はセルロイド成型加工のパイオニアである永峰清次郎翁(以後翁とします)を取り上げることといたします。



人 夫 子 み こ 翁 の 近 最

永峰清次郎翁(右)ととみ子夫人(左)

1856年(安政三年)に大阪府に産まれた翁が最初に従事した仕事は丸薬製造業でした。その後、糸屋、鼈甲問屋と勤めを変えた後に東京で独立したのは1882年(明治三十五年)のことでした。

元来パイオニア精神に富む翁は当時の新材料でゴムと呼ばれていたセルロイドに目を付けて櫛の製造を始めました。神田区から浅草区に移った後に薄物を使用した吹上玉の製造に成功したのは1913年(大正二年)のことでした。



現在ではプラスチック製となっている吹上玉

最初は夜店の玩具程度に思われていたのですが三越から注文が入り、さらに美満津からピンポン玉の製造を依頼され、玉を幾つも組み合わせた人形玩具の製造も行うようになります。

玩具製造の手順としては1.風車などの切り貼り物、2.ピンポン玉のような湯押し物、そして吹き込み成型がありますが翁が開発したのが吹き込み成型でした。金型の中にセルロイドの薄板を挟んで蒸気を吹き込んだ後に冷却するという成型法により玩具の幅が大きく広がり一般的なものになっていきました。



切り貼り物の風車



湯押し道具

翁も最初は湯押しでの製造を行っていたのです。先に述べましたピンポン玉の製造注文ですが、実はピンポン玉の製造のほうが吹上玉よりも早くて応用したのだともいわれています。とにかくこうして翁の会社は発展して行きます。

さらに ハンドル握り、チェーンカバー等の自転車用品の製造も手掛けるようになり海外にも販路を広げました。

1915年(大正三年)サンフランシスコで万国博が開催されました。その時に翁が出展したセルロイド玩具が先年大量に見つかり日本への里帰りを果たしました。



このように翁がセルロイド加工、中でも玩具製造に遺した功績は計り知れないものがあり、セルロイド玩具が殆ど姿を消した現在でも遺産が受け継がれていて今後も生きていくことでしょう。